

■ 市長から市民のみなさんへ

山陽小野田市長
白井 邦文



■ 学校図書館について

学校図書館法が改正され、図書支援員は「学校司書」と名称が変更になりました。本市は、平成24年度から市内全小中学校に専任の学校司書を配置し、以来、継続していますが、これは県内では本市のみです。

教育委員会の報告によると、本市では月2回程度の定期研修会を実施していて、これが学校司書の資質向上に大変役立っているそうです。学校司書の全校配置により、貸出冊数が、特に最近では爆発的に伸びているそうです。

平成24年度から3年続けて、市内の小中学校が「子どもの読書活動優秀実践校」として文部科学大臣表彰を受けましたし、平成26年度の「山口県読書感想文コンクール」では、赤崎小学校が学校賞を受賞し、同校の児童2名が最優秀賞と優秀賞を受賞しました。それだけでなく、この2名の作文は、今年度の県内小学生が使用する夏休み帳に、作文の模範例として掲載されたそうです。すごいですね。



■ 薬学部の開設時期が決まりました

資金計画の都合から、1年目は新生(120名)の受入れに必要な限度で施設を建設・整備したうえで、2年目・3年目は同様に施設の規模を拡大させ、4年目に施設全部の完成を図りたい。これが本市の薬学部関連施設の整備計画でしたが、教員を揃える面で協力してくれる学校法人東京理科大学の求める施設水準が高く、しばらく^{こうちやく}膠着状態でした。「日本の理科大学」から「世界の理科大学」へ大きく羽ばたこうとする大学側の構想と、地方創生の一環として「地域産業界のキーパーソンを育てる」ことを教育指針とし、かつ卒業生の6割は県内での活躍を期待する本市側との間で、これから作る薬学部のイメージにかなりの開きがありました。しかし、時間をかけ協議を重ねる中で、「西日本一の薬学部を！」(大学側)という夢は捨てず、一方で「卒業生の6割は県内に就職を！」(本市側)という現実的な目標も大切にすることで、双方の持つ大学のイメージを調整することができ、双方の努力と協力のもとに、目標としていた開設時期を1年延ばし、公立大学法人の2学部のうち薬学部は、平成30年4月1日に開設することが決まりました。

遅延になったことについて、関係者のみなさんには、深くお詫び申し上げます。